

それは穏やかな昼下がりのことだった。

テーブルの上の携帯がバネを引っ張るような耳障りな音を発して私を呼んだ。一週間前に風呂を掃除しようとして見事、携帯を水没させ買い換える羽目になった私である。まあ、まだ不慣れな携帯だしな、と呑気に覗き込んだ眼に映ったのは人が走るマークだった。

緊急……地震速報？

次の瞬間、立ってられないほどの揺れを感じた。地面が、生き物のように家を揺さぶっている。身体を引っ張られながら、私は恐ろしい考えに取りつかれた。

二階が、潰れる！

坂の途中にある私の家は一階がない所に二階がある、ちよつと変わった造りだ。近所の日照権を考慮して建て増した結果そうなった。相変わらず地面は狂ったように揺れている。このままでは二階の部屋の息子が危ない！階下から名前を呼び続けるが、なかなか降りてこない。後で聞くと、揺れは長く続かないと思い、何よりも大事にしている薄型テレビを押さえていたのだ。声の限り叫び続けた私は、最後には「潤（息子）が死んじゃう！」と絶叫していた（らしい）。自分では全く憶えていないのだけれど。やっときらめて降りてきた息子と恐る恐る外に出る。

揺れは収まったかと思うと更に激しさを増していく。いつまで揺れたら気が済むの？もう、やめて！こんな地震が続いたら間違はなく世界は終わりだ。普段はろくすっぽ会話も交わさない息子と手を握り合い、家の前の坂を上ったり下りたりして、少しでも安全な場所を探す。「水道が破裂した！」と叫んでいる人もいる。あちこちで道路にひびが入り、陥没し、ブロック塀は倒れている。敷地が崩れ落ちている家もある。

どれくらい時間がたっただろう。家の様子を見に戻った私たちが見たのは、動く筈も無いものが歩き、倒れ、砕け、ぶちまけられた室内だった。ところが驚いたことに、いつもは居候かと思うほど無気力な息子が、渾身の力で冷蔵庫、書棚、仏壇を、殆ど一人で元の位置に戻していく。「お袋、大丈夫。大丈夫だから」。思えば息子の子育てには随分と悩み、髪が逆立つ思いを何度も経験した。心が通じ合わず絶望した事もあった。だが、この頼もしさはどうだろう。「生きてるんだもん、なんとかなるよ」。私の手が届かない掛け時計をさりげなく掛け直しながら、息子は言った。

東日本大震災。物質的なものは失ったけれど、それより大きな、大切な贈り物を私は得ることができたのだ。